

山 本 公 司

# 通常学級で特別な支援が必要な児童への支援の導入と引き継ぎに関する研究

—「個別の引き継ぎ書」の開発とそれを活用した新しい支援モデルの提案—

## Introducing and Transferring Information of a Child with Special Needs in Mainstream Class Room : Developing and Presenting a Model Using the IT Sheet

山 本 公 司

Kouji Yamamoto

### 第1章 問題と目的

#### 1. 個別的な支援への対応に関する問題

個別の指導計画の作成率は年々増加してきている。しかし有効に活用されているかは、明らかではない(干川,2007)。個別の指導計画作成について河村(2008)は「一定の判断基準が必要」と述べている。徳永(1997)は、特別な支援の導入決定について「かなりの困難が伴う」と述べている。個別的で教育的な特別な支援を実施するかどうかの判断の基準は曖昧である。日本には、イギリスの Code of Practice のような一定の判断基準を示した規定はない。その判断は学級担任等の気づきや見立てにより様々である。

個別の指導計画を作成する程度ではない(徳永,1997)、あるいは何らかの理由で作成されていない児童に、個別的な教育的な対応が必要かどうか判断し支援を導入していくための資料の検討が必要であると考えた。

#### 2. 次年度への引き継ぎに関する問題

意識調査の結果、引き継ぎ内容やその方法、時間の確保などの課題があった。情報をきちんと引き継ぐことができる資料の作成や引き継ぎ方法の検討が必要であると考えた。

#### 3. 「個別の引き継ぎ書」(ITシート)の開発

#### 4. 本研究の目的

ITシートの開発と活用により「通常学級の担任等が学級内で配慮して支援するケースの児童」(河村,2008)の情報を確実に伝え、また支援を始める気づきや手がかりになるかどうか検証することを目標とする。

なお、その検証を通して「学級担任等が学級内で配慮して支援するケースの児童」(河村,2008)の部分の検討を行い、第5章において新しい支援モデルを提案

する。

### 第2章 研究の方法

#### 1. ITシートの開発と研究スケジュール

ITシートの開発・作成期、引き継ぎ期、活用期①、活用期②と大きく4つの時期に分けて実践した。

#### 2. 対象校(Z幼稚園は200X-1年度の情報)

- ・X県Y市立Z小学校(児童数51・学級数5)
- ・X県Y市立Z幼稚園(園児数16・学級数2)
- ・S県T市立U小学校(児童数564・学級数21)

#### 3. 対象児童とその担任(200X-1/200X年度)

- ・児童A子(小5担任D/小6担任G)
- ・児童B子(年長担任E/小1担任D)
- ・児童C男(小5担任F/小6担任H)

### 第3章 実践の結果

#### 1. 開発・作成期

ITシートは、筆者がコーディネーターや担任と相談して作成した。関係者からは「負担なく書ける量と項目でよかった」という評価であった。しかし「学習面という項目では記入が難しい」「どこまで書こうか迷った」という評価もあった。記入内容の精選や、作成・活用がしやすい様式を開発する必要があった。

#### 2. 引き継ぎ期

ITシートを使った引き継ぎ会実施後の評価は、ITシートを使った引き継ぎの有効性や、記録として残るITシートの必要性に前向きな回答であった。対象児童の引き継ぎ時間は、20分～30分であった。しかしITシートを作成していない児童の情報についての協議も行われた。そのため「かなり時間がかかった」といった意見もあった。今後、各学校において引き継ぎ会の時間設定や会の進め方の工夫が必要である。

### 3. 活用期①

活用期①では I T シートにより引き継がれた情報が、担任の支援に有効に活用されているかどうか明らかにした。担任が記入した児童の支援記録表には、I T シートの内容を参考に支援したと考えられる事実がいくつかあった。また担任の評価は「支援にとっても役立った」「I T シートに書かれたいた通りの実態で、対応しやすかった」であった。しかし「あまり先入観をもちすぎないようにしたい」という担任の思いや、担任の児童に対する実態の捉え方の違いについても十分考慮したうえでの有効性の判断が必要である。また記録の取り方の説明や記録表の様式の工夫に、課題が残る結果でもあった。

### 4. 活用期②

活用期②では筆者の提案を通して、I T シートの活用が担任の支援方法や個の支援に対する気づきにつながるかについて事例を通して検証した。「ことばの教室の先生との連携を通して、児童 A の実態や特性に応じた支援への気づきだけではなく学校での共通理解のもとで行われる支援にも発展した担任 G」「児童 B の登下校の課題を通して、問題が悪化する前の対応の必要性に気づいた担任 D」「I T シートなどの情報を通して、児童 C に有効であると考えた支援がクラス全体の支援への気づきにもつながった担任 H」という事例である。

## 第 4 章 考 察

I T シートは引き継ぎ会を開く機会を作り、転勤後の担任にも重要な参考資料になる。しかし誰もが作成しやすい様式の開発や、個別の指導計画を作成する「前段階」としての活用の工夫が必要である。また学校の体制に応じた引き継ぎ会の工夫なども必要である。

I T シートは新年度へ向けて個別の支援を始める気づきや手立ての準備に有効に活用される。しかし活用にあたっては記録の取り方を習得したり、段階的に支援方法の検討を行ったりすることも必要である。

I T シートの活用は担任自身の支援や児童の見立て、また担任の I T シートの捉え方や記録の取り方の変容に大きく関わったと考える。

## 第 5 章 新しい支援モデルの提案

個別の指導計画を作成する程度ではない（徳

永,1997)、あるいは何らかの理由で作成されていない児童の支援の導入を図るため、筆者は新しい支援モデルを提案する。担任は普通に行う支援だけでは不十分な児童の存在に気づけば、すぐに校内のコーディネーターと連携して I T シートを活用した支援の導入を開始する。I T シートが個別の指導計画を作成する「前段階」としての有効な支援ツールとして機能するのではないだろうか。

## 第 6 章 今後の課題

今後は、I T シートを使った次年度への引き継ぎや、個別の指導計画の「前段階」としての支援の導入、引き継ぎを考慮した新しい支援モデルの検討が必要であると考ええる。